

テーマ：私たちは何のために存在しているのか？ 題材：岩明均『寄生獣』全巻

『寄生獣』：1988 年～1995 年連載、全 64 話 アフタヌーン KC・新装版 (全 10 巻) / 完全版・講談社文庫 (全 8 巻)

“食べる”

ミギー 「イヌに宿ったものはイヌだけを食う 人間に宿ったものは人間を食う… とも食い専門の新生生物というわけだ」(1-87)

ミギー 「わたしの『仲間』たちはただ 食っているだけだろう… 生物なら当然の行為じゃないか シンイチにとっては同種が食われるのがそんなにイヤなことなのか？」**新一** 「当たり前めえだろ！人の命ってのは尊いんだよ！」**ミギー** 「わからん… 尊いのは自分の命だけだ… わたしはわたしの命以外を大事に考えたことはない」(1-88)

ミギー 『『悪魔』』というのを本で調べたが… いちばんそれに近い生物は やはり人間だと思うぞ… 人間はあらゆる種類の生物を殺し食っているが わたしの『仲間』たちが食うのは ほんの 1～2 種類だ… 質素なものさ」(1-90)

田村玲子 「寄生生物も成長しているのよ ただやみくもに人間を食い殺しつづけることが安全な道でないことにも気づいているわ これからはある意味で人間たちとの共存を考えなきゃならないところにきていると思うのよ だから「仲間」どうして集まり協力し合う必要がでてきたのだと思ってもらえれば…」**新一** 「ふ…ふざけるな！共存なんて…人食いの化け物どもと！」**田村玲子** 「…別の生き物と議論してもしょうがないんだけど…例えば人間と家畜は共存してると言えない？もちろん対等ではないわ ブタから観れば人間は一方的な人(ブタ) 食いの化け物になるわけだしね 人間たち自身がもっと雄大な言い方をしてるじゃない 「地球の生物全体が共存していかなばならない」(6-131～132)

“生きる”

新一 「寄生部分全体が「脳」であり「眼」であり「触手」なのだ／ところが こんなすごい力を持ちながら 内蔵や消化器は人間のものを拝借しなければ生きていけない つまりどうあがいても寄生生物なわけで 胴から切り離されるとすぐ死んでしまう」(1-147)

ミギー 「よく聞け！おまえに生きる権利があるというなら寄生生物にもその権利がある もっとも「権利」なんていう発想自体人間特有のものものだろうがね」(6-106)

新一 「こいつらも…必死に生きてるんだな」**ミギー** 「そりゃそうさ」**新一** 「寄生生物はだいたい何のために生まれてきたんだ／増えすぎた人間を殺すため？地球を汚した人間を減らすためか？そりゃたしかに人間の出した毒が生き物たちを追いつめてるのは知っている これこそそうだ あんなにも強かった「後藤」が小さな棒切れにこびりついてた毒であつてなく… 生き物全体から見たら人間が毒で…寄生生物は薬ってわけかよ／誰が決める？ 人間と… それ以外の生命の目方を誰が決めてくれるんだ？」**ミギー** 「どっちかに決めてくれ あまりのんびりはできないぞ」**新一** 「殺したくない… 正直言って… 必死に生きぬこうとしている生き物を殺したくはない… そうだ…殺したくないんだよ！殺したくないって思う心が…人間に残された最後の宝じゃないのか」(10-141～143)

新一 「人間に毒があるからってその生物には生きる権利がないっていうのか 人間にとって不都合だとしてもそれは地球全体にしてみればむしろ…」**ミギー** 「シンイチ… きみは地球を美しいと思うかい？」**新一** 「…わからないよ テレビとかできれいな景色は見たことあるけど」**ミギー** 「わたしは恥ずかしげもなく「地球のために」と言う人間がきらいだ… なぜなら地球ははじめから泣きも笑いもしないからななにしろ地球で最初の生命体は煮えた硫化水素の中で生まれたんだそうだ」**新一** 「… 天にまかせるか おれはちっぽけな… 1 匹の人間だ せいぜい小さな家族を守る程度の…」(10-144～146)

新一 「違う生き物どうし時に利用しあい時に殺しあうでも理解りあうことは無理だ…いや 相手を自分という「種」の物差しで把握した気になっちゃだめなんだ 他の生き物の気持ちをわかった気になるのは人間のうぬぼれだと思う 他の生き物は誰ひとり人間の友だちじゃないのかもしれない でも… たと

え得体は知れなくとも尊敬すべき同居人には違いない／他の生き物を守るのは人間自身がさびしいからだ 環境を守るのは人間自身が滅びたくないから人間の心には人間個人の満足があるだけなんだ でもそれでいいしそれがすべてだと思う 人間の物差しを使って人間自身を蔑んでみたって意味がない／あいつらはせまい意味じゃ「敵」だったけど広い意味では「仲間」なんだよなア／みんな地球で生まれきたんだろ？ そして何かに寄りそい生きて…」
(10-175～)

ミギー「道で出会って知り合いになった生き物が ふと見ると死んでいた そんな時 なんて悲しくなるんだろ？ そりゃ人間がそれだけヒマな動物だからさ だがな それこそが人間の最大の取り柄なんだ 心に余裕がある生物 なんとすばらしい!!」(10-216～217)

“繁殖する”

田宮良子「…わたしとこのAさんとで…セックスしてみたのよ 結果わたしは今妊娠してるの さてそこで問題 今わたしの体内で育っているもの…それはいったい何でしょう？」ミギー「人間」だろう…ごく普通の」田宮良子「…さすがに同種ね そう！まったく何の変哲もない人間の赤ん坊なのよ だとするとわたしたちはいったい何なの？ 繁殖能力もなくて ただ とも食いたいなことをくり返す…こんな生物ってある？」(1-183～185)

“存在する”

田宮良子「ハエは…教わりもしないのに飛び方を知っている クモは教わりもしないのに巣のはり方を知っている…なぜだ？ わたしが思うに…ハエもクモもただ「命令」に従っているだけなのだ 地球上の生物はすべてが何かしらの「命令」を受けているのだと思う…」新一「いったい何言ってるんだ…わかる？」ミギー「…」田宮良子「…人間には「命令」がきてないのか」新一「だから何なんだよそれ… 神様の話か？」田宮良子「わたしが人間の脳を奪ったとき 1つの「命令」がきたぞ… “この「種」を食い殺せ” だ！」(2-18～20)

田村玲子「たしかに個体個体を見ればずいぶんとひ弱な動物にも思える …けどそうじゃないのよ 我々

が認識しなくてはならないこと 人間と我々が大きく違う点… それは人間が何十 何百…何万 何十万と集まって一つの生き物だということ 人間は自分の頭以外にもう一つの巨大な「脳」をもっている それに逆らったとき 寄生生物は敗北するわ…」
(7-136)

田村玲子「これまでに38人殺した おもに食糧としてだが…しかし これは「仲間」の間ではかなり少ない方だと言える 足りない分は人間がふだん食べてる食事でまかなえた…つまり 寄生生物は必ずしも人間を食わなくても生存できるということだ／人間についていろいろ研究してみた… 人間にとっての寄生生物 寄生生物にとっての人間とはいったい何なのか そして出た結論はこうだ あわせて1つ寄生生物と人間は1つの家族だ 我々は人間の「子供」なのだ／だが…我々はか弱い それのみでは生きてゆけないただの細胞体だ だからあまりいじめな」(8-57～59)

広川「環境保護も動物愛護も すべては人間を目安とした歪なものばかりだ なぜそれを認めようとせん！ 人間1種の繁栄よりも生物全体を考える!! そうしてこそ万物の霊長だ!! 正義のためとほざく人間!! これ以上の正義がどこにあるか!! 人間に寄生し生物全体のバランスを保つ役割を担う我々から比べれば 人間どもこそ地球を蝕む寄生虫!! いや…寄生獣か！」(9-118～119)

山岸二佐「な…何者なんだ… きさま… きさまら… は」後藤「見たとおりさ…単なる野生生物だよ」山岸二佐「生物…だと…？」後藤「おまえらこそ何なんだ？」(9-157)

ミギー「つまりそういうことなのさ…お互い理解しあえるのはほとんど「点」なんだよ 同じ構造の脳をもつはずの人間どうしてさえ例えば 魂を交換できたとしたらそれぞれ想像を絶する世界が見え 聴こえるはずだ」(10-162)

浦上「寄生生物どもが人間を殺すなアわかりやすいただの食事だ…でもこのおれア何だと思う？ いや…たぶんおまえにやわかってるはずだ おれこそが人間だとな なんておれ以外の人間はこうガマン強いのかねえ 人間てなもともとお互いを殺したがってる生き物だろ？」(10-197～198)